

悪役令息イアン・ラツセルは  
婚約破棄したい

## 目 次

悪役令息イアン・ラッセルは婚約破棄したい

番外編 最愛を堕とすまで

# Characters

## ◆アルフレート・ジェニングス◆

第二王子でイアンの婚約者。  
イアンの塩対応でどんどん距離が開き、  
神子に夢中になっている  
様子だったが……？

## ◆レノックス◆

平民上がりで騎士を  
目指している。  
真面目で堅物。

## ◆ハロルド・ジェニングス◆

第一王子でドミニクの婚約者。  
無表情な弟とは違い、  
いつも綺麗に微笑んでいる。

## ◆ローズリー◆

平民上がりの神子。  
神によって男を  
狂わせてしまう運命にある。

## ◆ドミニク・ウォーターズ◆

立場が入れ替わるかもしれない不安から  
イアンのことを敵視している。  
美しさと可愛さが混合する圧倒的美人。

## ◆イアン・ラッセル◆

ラッセル侯爵家の次男。  
幼い頃に突然前世を思い出し、  
悲惨な最期を迎えないよう婚約者に塩対応中。

悪役令息イアン・ラッセルは  
婚約破棄したい

## プロローグ

「イアン・ラッセル……婚約を破棄したい」

イアンは目の前に座るこの国の第二王子殿下をじっくりと眺めた。

金の髪に陶器のような肌、麗しいその碧眼を縁取る金色は頬に影を落としている。決して女顔というわけではなく、かと言つて野性的というほど男くさいわけでもない。長身で体格もほどほどに良く兎にも角にもバランスが良い。王家人間は大抵驚くほど容姿が良いのだ。神話を事実とするならば神と人間の子孫とされるので、同じ人間とは思えないほど整っているのも当然なのかもしれない。

そんな薄気味悪いほどの美麗な顔がイアンをジッと見返してくる。温度の無いかなり無機質なその視線は、一応の婚約者である己に向ける視線に相応しいとは思えない。ただ、相対するイアンも

眉一つ動いていないので、似たり寄つたりではあるが。

冷えた空気の中、今の心境をうつかり表情に乗せないよう、まだほのかに温かい紅茶で喉を潤す。焦らすようにゆつたりと何度もカップに口を付け、時間をかけて中身を全て飲み干すと、イアンは徐に両腕を上げて、これでもかというほど力いっぱいに大きな丸を一つ作つた。

「……は？」

第三王子殿下の間抜け面を見たのは、後にも先にもこの時だけだつた。

「イン様、おはようございます」

「んー、おはよ」

できる従者兼護衛のニールの声に爽やかな笑顔を返す。この世界に生まれてからというもの寝起きは頗る良いので、そのままグッと伸びをして立ち上がった。その様子を見ていたニールは、さり気なく扉を開いて洗面所へ誘導してくれる。そのまま洗面所へ向かい顔を洗い歯を磨きつつ、インは密かに電動歯ブラシが欲しいと思う。

実はインには誰にも言ったことのない秘密があった。

己の前世であろう記憶があることだ。

時折頭を掠めるそれは、一人の男が地球という星の日本という国で生まれ死んだ記憶だつた。これと黙つて特筆すべきところもないが、家族は父と母に妹がいて一般的な仲の良さだつた。ほんの少し異質だつたのは、妹が腐っていたことくらいだらう。兄であるその世界のインはそんな腐つた妹に死ぬほど甘かつたので、当然のようにボーネスがラブするゲームの手伝いをしたし、あらゆ

る漫画やアニメの萌えを語られ、趣味でもないその筋の知識が無駄に豊富にあつた。

普通の学生生活を送り普通の一般企業に勤め、平凡だけど笑顔が可愛くて家庭的な優しい女性と結婚して子どももいた。ただ、五十半ばに会社で倒れてからの記憶がないので、恐らくそのまま死んだのだろう。心臓発作とかそういう類だつたのかもしれない。

子どもはもう大きくなつていて、生命保険や貯蓄があつたので妻共々大丈夫なはずだ。妹は腐つた趣味に理解のある男性と結婚し子どももいたし、両親は第二の人生をエンジョイして旅行三昧だつた。きっと皆悲しんでくれただろうが、支えてくれる人がそれぞれにいたので、そう心配もしないない。

そんな風に冷静に前世の記憶を整理していた。正確に言えば今世の己と前世の己は別人格であるという想いが強くなりしたる未練はない。万が一前世の記憶に引き摺<sup>ずり</sup>られていたら、皆に会いたいと毎日泣き暮らしていただろうから、それでよかつたのだと思う。

前世の記憶はあれど、まごうことなくインとして生まれ、生きている。前世ののような娯楽がないことは少々不満だが、自身で何とかしようと思いつつも無く、今世に馴染もうとしているのが今のインだ。

「よし、終わり。お腹空いた！」

軽く身だしなみを整えると小さく腹が鳴つた。どんなに憂鬱な朝でも腹は減るので。己の腹の音

を聞きながら、広い屋敷の中を歩きダイニングルームへ向かう。長い廊下を歩いていると、隣とも後ろとも言えない位置を保ちながらついてくるニールが口を開いた。

「皆様、既に朝食はお済みです」

「あ、なんだ。兄様は？」

「旦那様に付き添つて領地へ視察に」

「母様は？」

「本日は体調が良いとのことで、サンルームで編み物をしておいでです」

「体調が良いなら安心だね。でも父様が帰つてきたらまた大げさに心配するんじゃない？」

イアンの揶揄つたような口調にクスクス笑うニールは、男ながらに小柄で可愛らしいタイプの人である。こげ茶色の髪で白い頬にはうつすらと雀斑そばかすが散つていて子犬みたいだ。しかし子犬のような見た目に反して、磨き上げた護衛術でニコニコしながら、自身より大柄な不審者を簡単に捻じ伏せてしまうのだから人は見かけによらない。

「昼すぎには王宮へ向かいますので、朝食が終わつたら準備が必要ですが……」

「準備の前に少し母様のところへ顔を出すよ」

「承知いたしました」

「まあ、あちらも俺に興味はないから、そんなに気合いを入れなくても大丈夫だよ」

「……そろそろ王家に苦情を入れてはどうでしょうか」

「大丈夫大丈夫。もう少しだから」

イアンのスケジュール管理もニールの仕事なので、毎朝一日の予定をニールから雑談交じりに聞き、己の頭の中の予定と擦り合わせる。多少不穏な会話になつたが、ニールはイアンの様子を見てそれ以上余計な話はしない。

重い気分を吹き飛ばすように小さく鼻歌を歌いつつ辿り着いたダイニングルームは、他家に比べてもかなり広い部類に入る。ラッセル家は領地に比例するように屋敷も大きいのだ。既に給仕が待機しており、席に座ると次々と美味しそうな朝食を出してくれた。

「わつおいしそう。いただきます」

洋食だが味は美味しい。変に日本での記憶があるため、偶たまに強烈に和食を食べたくなるのだが無いものは無いので我慢している。

ちなみにこんなに洋風な世界でも食前の挨拶は“いただきます”で食後は“ごちそうさま”だ。この世界が日本発のBシゲームだからだろうか。その辺はよく分からないが、当たり前のことなのでイアン以外の誰も違和感を抱いてはいない。

そう言えば、その当たり前挨拶に初めてヒヤリとしたのはいつ頃だつたか。もうよく覚えていなければ、かなり幼かつた頃から度々感じる違和感。いつも通りに“いただきます”を口にする

と、前世の曇りが重なり何となく冷や汗をかく、ということはしばしばあるのだ。もちろん周囲も同じ挨拶をして手を合わせるので、作法を間違っているわけではないのだが、一瞬ヒヤリとするその感覚はわりと今も続いている。

他にも違和感を覚えたことは色々ある。例えば髪を乾かすのはドライヤーだと思っていてそれが無いのに驚いたり、夜遅い時間に甘い物が食べたくなつてコンビニに連れてつてと駄々を捏ねてみたり、小さな頃は様々な場面でそれなりにやらかしている。拙い言葉な上、おそらくこの世界の言語ではなく日本語で発音していたので「あらあら想像力豊かね」「まだ言葉がうまく話せないからもどかしいのかしら」と流されていたから、誰にも気づかれてはいない。どちらにしても幼少期は相当変な幼児だったと思う。

「ごちそうさまでした！ 料理長に今日も最高においしかつたって伝えて」

「はい、確かに」

ゆつたりと食事をし、白々しいほど元気いっぱいに挨拶をすると、給仕係がニコリと笑い頭を下げる。それを目にすると少し急ぎ足でサンルームに向かった。

噎せ返るような香りが鼻腔を掠り、目には眩しい色とりどりの花。そんな空間の中で一人の男性がにこやかに微笑みながら編み物をしていた。美しい黒髪が艶めき、その白肌は太陽の光を浴びて透けてしまった。薄つすらと聞こえる鼻歌の声は男にしては高く、女声というには低い。彼の

唇が柔らかく動く度、邪魔にならないように控えている従者がうつとりと感嘆の息を漏らしていた。

「母様！ 体は平気ですか？」

「イアン、おはよう。今日は体調も良いですよ。もう朝食は食べましたか？」

「おはようございます。朝食はいただきましたよ」

少し心配そうな顔をしているこの絶世の美青年が、何を隠そうイアンの母親である。テーブルに座つたままの母の対面へ座ると、相変わらずの麗しさに従者と同じくうつとりと顔を崩した。

「昨日は疲れたでしょう？ もう少しゆつくりしても良いのですよ」

「ありがとうございます。でももう十分寝たので元気です！ 今日は時間もあまりありませんしね」

「そうね……準備がありますからね」

母が心配しているのはイアンの精神状態だ。本日は王宮へ出向かなければならぬし、昨日は小規模ではあるが第二王子殿下派のトップが主催した茶会に参加していた。嫌なことが一日も続くので実はかなり心配されているらしい。それ違う使用人たちの目にも劳わりの色が見え隠れするので、疲れを全く隠せていないのだろう。

「まあ二ールがいますから、準備はしつかり間に合います」

「良かつたです。昨晩は少し帰りが遅かつたから心配していたのですよ。イアンは社交が苦手でしよう？」

「そうですね、でも随分マシになりましたよ」

「ええ。イアンが苦手と思っているのが不思議なくらい、皆さんからの評判はいいのよ」

ふふふ、と微笑む母にへラリと笑みを返す。そもそもイアンが茶会や夜会に楽しみを見出せず苦手意識を持つ一番の原因是、前世の記憶による弊害だと言つていいだろう。確かに記憶は記憶でしかないのだが、それでも身分差の少ない社会を知つてはいる。記憶の中の前世と今世では振る舞いから表情の作り方、喋り方にすら大きな違いがあり、貴族連中と少し話をするだけで精神的負担が大きい。貴族社会は社会人経験のある大人の男の記憶の数倍、足の引っ張り合いが凄いのだ。しかも幼少期からそれなのだから好きになれる要素が無い。

イアンが平民として生を享けていれば、案外気苦労なく生きていたかも知れないなと思う。だが現実は高位貴族として生まれたため、どこか堅苦しかつたり、周りの人間と己のズレを頻繁に感じたりするのだから儘ならない。けれど、お金に困ること無く高い教養も身に着けられる家に生まれたことは幸せだ。家族仲も良く愛情たっぷりに育てられているので恵まれていると理解している。だから家族に報いるためにも、少々面倒だとしても文句ばかりも言えない。

例え嫌々でも社交さえ身に着けてしまえば気苦労も減るし、小さな失敗なら見逃されるのも今のうちだ。嫌いだからといって駄々を捏ねられるほど中身が幼くはないのだから、一応は克服しようと頑張っている。一口に克服とはいっても好きになることは一生ないだろうが、慣れるより他ない

のだ。

そういった理由から、イアンは第二王子殿下の参加しない、同派閥の社交場にだけはなるべく顔を出すようにしている。会話がメインの茶会などは特に大嫌いなのだが、社交場では完璧に見えるいるらしいので、なんだかんだと貴族が板についてきていると自負している。

幼い頃のイアンの話し方は、普段は穏やかな講師がブチギレそうになるほど酷かつた。これはもう癖づけるしかないと、家族の前ですらかわい子ぶつたような口調で丁寧に話すのも、ボロを出さずには過ぎてはいる理由の一つだ。

「無理をしていないのであれば良いのだけれど

「全然問題ないです。それにもうすぐ社交も増えてきますから、これくらいじや怠けていられません」

フフフと控えめに微笑む母は、父といつまで経つても見てられないくらいにラブラブだ。それを体現するように再び教会へ出向き子どもを宿した。結婚する時に子どもは三人欲しいと話していたらしい。母も父も十八で結婚して、一年過ぎた頃に一人目の子どもができたのでまだまだ若い。子ども二人が手を離れたので体が元気なうちにもう一人、と思ったそうだ。

そんな状況なので今屋敷中が殊更、母に対して過保護に接している。父なんかは行き過ぎて見つとも無いくらいだ。三人目なのだから少しは落ち着いて欲しいのだが、どう考えても無理そうで

ある。ちなみに母は毎日退屈気味だそうだ。それでも幸せそうにしているのだから誠に良きことである。

「では、僕はもう行きますね。準備がありますから」

元気そうな顔色を見て安心したイアンはその場を去ろうとしたが、母は一瞬何か躊躇ったように視線を泳がせた後、口を開いた。

「今日は久しぶりの王城でしよう。イアン……あなた本当は……」

「母様、大丈夫です。何事も順調ですよ」

サラリと母の言葉を途中で止めニッコリと微笑む。この屋敷に主となる人間を裏切るような者はいない。だが、人の口に戸は立てられぬのも事実。王家が不敬と感じかねない言葉を家族に口にして欲しくないのだ。己は良い。何だかんだ今まで何ともないし、順調に世界は回っている。万が一、何か気に障つたとて己一人の罪だ。しかし一体何が原因で人生が左右されるか分からないので、イアンは家族の発言には少々敏感だ。

「……そうですか……そうですね。少し心配すぎましたね」

「ええ。僕はとても恵まれています」

イアンは母の膨れたお腹を見て目を細めると、軽く挨拶をして少し急いでサンルームから自室に戻る。家族との間にある空気感はイアンにとつて幸せでしかない。ほんわりとした温かい気持ちを

抱え、少し急ぎ足で歩を進めた。ほんの少しゆつくりしそぎてしまったため、付いてくれている二ールに声を掛ける。

「二ール、時間は大丈夫だよね」

「ええ。この二ールにお任せください」

「さすが僕の二ール」

母だけじゃなく他の家族も二ールも、今のイアンをとても心配してくれている。けれどイアンは既に対策を講じているのでそこまで現状に不安を抱いてはいない。多少不快に感じることははあるけれど、そもそも少しの間だけのはずだ。もうすぐこの歳になるまで振り回されてきた何もかもとおさらばできる。そう気を奮い立たせて先を急ぐ。頭の中に浮かぶ今までの彼はを思い出しながらコッソリ微笑んだ。

（もうすぐ自由になるぞー！　あと少しの辛抱だ！）

今でこそ前世の記憶を記憶として受け入れているが、幼き頃はもつとずっと曖昧だった。そんな前世の記憶が鮮明に蘇つたのはイアンが六歳の頃だ。薄らぼんやりと思い浮かぶ別世界のことを、それまではまだ特に気にかけてなかつた。

しかし、記憶が完全に蘇るターニングポイントは突然やつてきたのである。

◇ ◇ ◇

大きな鏡の前でニールが一生懸命にイアンを磨き上げる様子を眺めながら、全てを悟るきつかけになつたある日の出来事を思い出す。もう懶<sup>おはなづ</sup>だが、幼いイアンが王宮に初めて御呼ばれした日。その日からイアンの意識は大きく変わつた。

今思えばアレは王家のご子息たちの友人、もとい側近になる者たちを選別、或いは婚約者を探すための集まりだつたに違ひない。

ともかく何も知らない子どもたちはイアン含め、初めて見る白亜の城と広大な敷地に設けられた裏庭、見たこともないキラキラした大量のお菓子に興奮していたのを覚えてる。まだ身分等もあり関係なく複数人で無邪気に遊んでいたはずだ。だがイアンはなんと、王家の広大な裏庭にある小さな池で溺れたのだ。誰かと体がぶつかった気がしたが、その子が無事だったのかすらも覚えていない。イアンは当時、どうやらはしゃぎすぎていたらしい。

見た目は綺麗とはいえ不衛生であるう池の水を飲んだイアンは、その夜から当然のように熱を出しそのまま体調不良で一ヶ月近く苦しんだ。そこから断片的どころか膨大な前世の記憶を次々に思い出し始めたのだ。体調不良が長引いたのは絶対に知恵熱もあつたとイアンは確信している。

そんなこんなで熱が治まつて徐々に体調が良くなり、膨大な記憶を少しづつ整理していたイアン

は気づいた。この世界は前世の妹が一時期ハマつていた、鬼畜で肌色の多い、そんなに人気でもなかつた、十八禁のBLゲーム『君の隣で誰が笑う』略して『キミ誰』の舞台と似通つてゐる。

鬼畜十八禁BLゲームというだけあって、そのゲームは物凄くエロ特化型だつた。性質上、主人公は色々とエロ方向で悲惨な目に遭う。玩具、薬物、強姦、複数、公開プレイは当たり前。なんなら全く関係ないモブにも無駄に襲われるし、イケメンばかりを手玉に取るので、メインのイケメンたち以外からは死ぬほど嫌われる。

『——いやいや、何の過去もないんかよ！　おかしいだろ』

『何もなくてもいいのよ。そういう影があるつぱいのがウケんの！』

『でもさ、普通は背景を掘り下げてそこで感情移入したり……』

『おにい、これ、エロ見るためだけに作られたものよ？　エロさえ気合いが入つてて絵が綺麗ならそれでいいんだから！』

『わからん。全く理解できん』

遠い過去の妹の声が思い出された。そう言えば攻略対象者は全員、特に悲しい過去などないのにほんのりヤンデレ要素がある。今世になつてもその辺りの設定は意味不明だ。対する主人公はエロ特化のため、直ぐに体は快楽墮ちする癖に精神が異常に強かつた。誰に襲われようと誰に嫌われよ

うと、恋愛に突き進むタイプの人間だ。主人公を動かしているのがゲームをしている人間なのだから、当たり前と言えば当たり前なのだが、現実にいたとすれば怖すぎる。

そしてイアンはそのゲームのパッケージに一番デカデカと描かれた公式ヒーロー、の後ろで少し小さめに描かれた、そのヒーローの弟の婚約者だ。つまり第一王子殿下と第二王子殿下、どちらも攻略対象かつどちらにも婚約者がいる設定で、第二王子殿下がイアンの婚約者になる男である。『弟の方いる？ 要らないよね』と何度も度思つしたことか。この半端な設定も人気が出なかつた原因の一つだと思う。絵がとても綺麗だったのに勿体ない。

なんにしてもイアンと第二王子殿下は幼い頃からの婚約者で、学園を卒業したら正式に結婚すると決まっている。だが学園生活二年目が始まつてすぐ、突然現れた平民である主人公に婚約者の心を奪われてしまうわけだ。イアンからすると死ぬほど面白くないだろう。

王家に嫁ぐのだ。生半可な気持ちでは無理である。正に、三百六十五日ほぼほぼ休みなく城へ出向き、厳しい花嫁修業もとい王妃教育が行われる。通常の流れで行けば第一王子殿下が王座へ、第二王子殿下は臣下として国のためにあくせく働く運命にある。しかし、有事が起きた時のスペアでもあるため、万が一を考えて第二王子殿下にもそれ相応の教育がなされ、その婚約者にも王妃教育が施されるのだ。

青春を過ごす時間など一日もないし友達もできるわけがない。唯一の心の拠り所は婚約者なのに、

目の前で主人公とイチャイチャセックスされてみろ。想像するだけで悲惨である。悲しみと怒りで心が壊れたゲームの中のイアンは当然のように主人公を恨み、苛め抜き、最後には殺そうとする。

しかし、杜撰な殺人計画は当然見事に失敗。主人公は傷一つ付いてない体で、沢山のイケメンに守られて困つたように微笑み罰の軽減を求めるが、周りのイケメンたちがそれを許さず、イアンはよくある断罪劇へと引っ張り出されるのだ。

好きな子を苛められたのだから同じくらい傷つけたいのだろう。攻略対象者たちのその気持ちは痛いほど分かる。イアンが罰せられるのは妥当だ。しかしながら腑に落ちない。婚約者がいるのに他者に堂々と手を出した攻略対象者たちも何か罰を食らうべきでないかと思うのだが、まあ所詮はゲームだ。

イアンはそうしてその身を墮とす。主人公がハッピーエンドだとイアンは修道院行きになるだけだが、バッドエンドだとなぜか悪役令息の最期まで鬼畜仕様になる。ゲームのイアンの場合だと、確かに男娼に墮とされ好きでもないおつさんたちに好き勝手抱かれ心が壊れたまま衰弱して死ぬ。なぜ主人公の進むエンドの種類で悪役令息の命運まで変わってしまうのかは謎だ。イアンだけじゃないが、攻略対象者の婚約者たちは大抵、皆が悲惨な目に遭う。

前世のイアンは死んだ目でスチル埋めのためだけに、各ルートのハッピーエンド回収をさせられていたのだが、どれもざまあと思うよりも可哀想でとても不快だった記憶がある。悪役た

ちの最期は流石にスチルじやなく文章でサラッと伝えられる程度だったが、インパクトが強かつた。かつての妹はその可哀想なのが妄想が捲つて良いと言つていたが、その趣味だけは最後まで理解できなかつた。

どうでもよいことであるが、妹の攻め推しキャラは未来の宰相候補で、そのルートで出てくる悪役の婚約者が受け推しキャラだつたことを思い出す。そのためか、そのルートのバッドエンドは受けがどうなつたかの一文を見るためだけに己で回収していたので、それだけは終ぞどういつた結末を迎えたのか知ることはなかつた。

何にしてもこのゲームのことは色々腑に落ちないし、前世の妹の趣味は理解できないままだ。

「お洋服は一式全て揃えております。一応、第二王子殿下の色味を入れたアクセサリーも準備しておりますが」

「相手の色のものはいらない。見られてないから問題なし！」

「承知いたしました」

顔や髪のセットが終わると、今度は無駄に装飾の付いた服を着る番だ。順番が逆の方が良さそうなものだが、イアンは正装が好きではない。動きづらいし汚すといけないし何も良いことなどない。特に化粧を大げさに施すわけでもないし、基本前開きの服が主流なので、ニールがイアンに合わせて苦痛にならないように着飾つてくれているのだ。他家ではどうなのか知らないので、そもそもそ

ういうものかもしれないが。

ニールはイアンの様子を心配そうに眺めながらも、素早く着替えさせてくれる。正直己で着替えられるものだが仕事を取るわけにもいかないので、こんな時はいつも指示されるがままクルクル体制を変えて大人しくしている。

（もし俺が女なら豪奢なドレスが用意されてて、流石のニールでも一人で対応するのは無理だろうな……うわあ今気づいた。もう女性の姿が朧げになっちゃつてるよ……）

鏡の中の着飾られていく己を見ていると、ふとそんなことを思った。今世と前世の世界の違いは沢山あれど、大きな違いの一つはそもそも女性が存在しないことだろう。女性がいないと人類は滅亡の危機に瀕するところであるが、当然対策がなされている。女性がいないならば男同士で子どもを産めばいいじゃない、ということだ。

これも記憶が落ち着き、ゲームのことを思い出してから、そういうえば……とやつと疑問を感じたことである。自身の母が男であることに全く違和感がなかつたので、暫くは不思議にも思つていなかつた。元々ご都合主義のゲームの世界とはいえ、まさか現実にも反映されているとは恐れ入る。物語が男だけで完結するので、ゲーム上では女性が存在しない方が都合が良いのだろう。それが当たり前の世界なので特に嫌悪感はないが不思議だとは思う。

もちろんすんなり自分の中に落とし込めたわけではない。疑問を覚えてしまえば途端に、前世の記憶の中にある柔らかな曲線の女体を思い浮かべては混乱したりしていた。異性愛者であつた前世

の記憶と、男同士で好き合うことに何の躊躇もない今世の人格が覗き合っていた時期は、周囲からすると突然、躊躇つたり唸つたりする危険人物だったと思う。

ちなみにゲームをしていた頃から思っていたが、教会で祈りを捧げるとき小さな光がふよふよと現れ、なぜか必ず受け側の腹に入つて、そこから突然命宮と呼ばれる器官ができる、両親がやりまくると妊娠し、十月十日で腹から大きくなつた光が再び現れ、そこから子どもが生まれるというのばかり無理のある設定だと思う。勉強中に何度も頭に浮かんだ「リバカップルの時はどうなるのですか」という質問はなんとか控えたが、英断だつたに違いない。

「イアン様、もう少しで終わりますから寝ないでくださいね」

「ごめんごめん。寝てはしないよ大丈夫」

色々なことを思い出しつつかり目を瞑つて頭を下げてしまつた。正直、暇なのだ。ニールに愛想笑いを浮かべつつまた頭を上げてキリリとした顔を作つておく。服を着てしまうと最後にアクセサリーを身に着けなければならない。再び鏡の前に座らされ、ピアスやらネックレスやら指輪やらで、派手にならない程度に飾り付けられるのだ。複数ある候補から真剣な顔をしたニールが選んでいるのを横目に、小さく欠伸を噛み殺した。

（それでも、ここまでゲーム通りに進むなんて怖すぎるよなあ）

色々とゲームを思い出した当初は、己の人生で一番の絶望と混乱に満ちていた時期だと思う。池に落ちて一か月近く苦しみ抜きやつと元気になつた頃、『絶対に婚約回避するぞ』と鼻息荒く決意したもの、まさかその数時間後オーノー！と泣き崩れることになるとは夢にも思わなかつた。どういった経緯があつたかは未だ知れないが、イアンが病に臥せつてゐる間に既に第二王子殿下の婚約者に納まつていたのだから、このゲームの強制力は侮れない。

非情な現実に相対した当時のイアンは咽び泣き、よくある転生モノの漫画や小説等を必死に思い出しこの世界と比較した。

まず俺T S U E E E Eはできない。この世界には一応魔法のようなものはあるが、使用できるのは極一握りの人間だけであるし、どんな魔法があるかも正直よく分からない。

そもそもドラゴンや魔王のような存在はお伽話の中だけであるし、スタンピードに至つては長い歴史の中で一度も起きたことはない。魔物はいるし脅威ではあるが冒険者や騎士が討伐していて、被害はあれど現状この世界が滅びるほどのものではない。つまり一番楽しそうな、魔法での無双はできない。

次にこの世界の特徴と言えば、神子という存在が語り継がれていることだろう。神子とは簡単に言えば神の遣いである。嘘か本当かはさて置き、一先ず神子が現れたらば、その国のその代はとて

も栄えると言われていて、魔法使いよりもずっとずっと特別な存在だ。しかしその役はイアンに割り当てられたものではない。

当然のように主人公がその神子である。この世界では生まれた子どもが無事に三歳を迎える頃、平民貴族関係なく必ず一度教会に向かう。そこで神の祝福として生誕の儀式をするのだが、その時に使用する神玉が白く光ると神子なのだと言われている。儀式が三歳で行われる理由は、その歳を無事迎えるまでは神の身元に魂が在るとされており、本当の意味で生まれたとされるのがおぎやあと泣いて誕生してから三年後だと言われているからだ。

また、後天的に神子と判明する者がいるかもしれない、ということで十五の歳にもう一度簡単な儀式をすることができる。未だかつて一度目の儀式で神子と判断された人間はいないので強制ではなく任意だ。本来必要のない二度目の儀式は、何代目かの王が自身の代に神子が現れないことに納得がいかず法を変えたことが始まりだ。一時期は強制だつたらしいが結局神子が現れる事はないかつたので、数代後の王が法を改正したらしい。全国民が一度儀式をすると教会の負担が大きいため改正したとも伝えられている。

ともかく、今まで二度目の儀式で神子が現れた事例などなかつたのだが、ゲームの舞台ではその“絶対”が崩れる。

主人公が偶々少し遠出をして野菜を売りに出たところ、教会の人間がやたら野菜を買い取つてくれたのがことの始まりだ。善良な主人公は量の多さから運搬を手伝い、その際の何気ない会話から

二度目の儀式をする機会がやつてきたはずだ。神子は心が乱れれば未曾有の自然災害を起こす存在だと言わっているので、突如現れた神子に教会は飛び上がるほど驚いたに違いない。それどころか、ボロボロの服で野菜を売っている姿を見て、心臓が一回くらい止まつたかもしれない。

さて、このように転生したとてイアンに割り当てられた役柄は特別な存在ではない。物語を盛り上げるための当て馬だ。一応体を鍛えたりもしてみたけれど突出した才能はなかつた。勉学にしつてほどほどに成績は良いが、飛びぬけて良いわけでも天才でもない。そんなイアンが、あの日から何か派手に行動を起こしていたとして、すんなり婚約者から外れることができただろうか。正直王族相手に高位とは言え、たかが貴族ができる事など限られているのだから、悪い方向にしか向かなかつただろうと思つている。

結果的にあの時から今まで、イアンは派手に行動を起こしてはいながら、着実に第二王子殿下にとつて“不要物”となり下がつていた。きっとこれで正しかつたのだと言い聞かせるのは、一度や二度じやない。

「こちらと、こちら、それからこちらも一度身に着けていただきて少しバランスを見ますね」

「うん、よろしく」

ニールが選び抜いた装飾品をこちらに見せて意思を確認していく。婚約者や恋人や夫夫などの間

では、己の髪や目の色のアクセサリーを贈り合うことが主流だ。だが、イアンは余程の状況じゃない限り己の色を身に着けるようにしている。己の髪や瞳が黒色のため、イアンの装飾品は黒っぽいものが多い。今ニールが提案してきた装飾品も濃淡に違はないはあれど全体的に黒っぽい。楽しそうにイアンを着飾つていくニールには悪いが、正直イアンはどうでもいいことなので、ニールに意見したことはない。

鏡の中の己の顔を眺めつつ、ゲームの主人公を思い浮かべて身震いする。イアンからしてみれば主人公は人外染みていた。ゲームプレイ中あれだけ鬼畜工口に襲われていたというのに、災害描写がなかったという点から一度も精神を乱してなかつたことになるからだ。主人公の精神が鋼すぎて怖い。そんな人と対等に渡り合い王子の心を繋ぎ止めるなんて無理だし、なんなら別に第二王子殿下のことは好きでもなんでもないから、巻き込まないで欲しいと心から思つてている。

「さあ準備は整いました。いかがですか？」

「うん、見られるようになつたよ」

「イアン様は元々美しいのですから当然です」

ニールに磨かれたイアンの姿は美しかつた。主人公のライバルキャラなのだから当然である。「面倒くさい」「今すぐ逃げ出したい」という気持ちを頭を左右に振つて追い払い、気合を入れて玄関へ歩いて行く。それ違う使用人たちの心配そうな表情にとびきりの笑顔を返しながら、やたら豪華な屋敷を出ると、自家の馬車へ乗り込んだ。



ニールが駄者の隣に座ると、馬車の中はイアン一人になる。

「折角休みなのにさあ」

王宮へ辿り着いてしまえば暫し堅苦しい時間が続く。面白くも無い時間のために休日が潰されるのは不快だが、仕方がないことなので大きな溜息を吐いて鬱憤を晴らす。

年々苦痛になる第二王子殿下との交流は、遡れば随分前から続いている。残念ながら婚約者になつたことを知つた次の日、第二王子殿下は婚約者を見舞うという名目でラッセル家にやつてきた。イアンの記憶上ではそれが初めてとともに言葉を交わした日である。

イアンはその時、既に婚約解消、最低でも婚約破棄を目指すと決めていたのだが、相手は歩く國家権力だ。いくら高位貴族とておざなりな対応はできない。立場的に無視はできないしラッセル家側からの婚約解消も難しい。そもそもまさかそんなに早くお目見えするとも思つてなかつたので、そう熟考する時間もなかつた。そこで慌てて思いついた目的を達成するための手段は、出力が最低値で済む相手への無関心を装うことである。

『イアン、体はだいじょうぶか?』

『だいじょうぶです』

『くだものをもつてきた。この中に好きなものはあるか?』

『きれいなものはないです』

だが意外にも無関心であることは難しかった。同じ年で、なんなら精神年齢が上のはずのイアンよりも随分成熟しているらしい第二王子殿下は、殊更柔らかに微笑んでイアンを気遣った。振る舞いも言葉遣いも既に大人と言つていいほど落ち着いている彼は、必死にイアンに言葉をかける。

『俺たちはこんやくしゃになつた。もう聞いただろうか』

『はい』

『これからよろしくな、イアン』

『はい』

『……何か好きなたべものはないか? ほしいものも、なんでももつてくる』

『またくるんですか』

『……きてはいけないのか?』

『いいえ』

『いいえ』

この頃の第二王子殿下は今よりずっと表情が豊かだったようだ。機械的に、意識的に話を広げないように返事をするイアンに、彼は悲し気な表情を何度もしていたがイアンは酷い態度を取り続けた。

『……今日はつかれているのか?』

『いいえ』

『俺とはなすのは、いやか?』

『いいえ』

『そうか……ではまたくる』

『ありがとうございます』

暫くは何が好きか、何が欲しいか、普段何をして遊んでいるか、と色々な質問をされたけれど、結局、第二王子殿下は悲し気な顔をして肩を落とし帰つていった。

それを見て胸を酷く痛めたけれど、イアンは知つていた。彼はこんなに優しく接しながらも、あれだけ尽くしていたイアンをあっさり捨てるのだ。イアンは不思議なくらいに己の心に憎しみにも似た強い感情が滲み出ているのが分かつた。全く好きでもなんでもない第二王子に対してもう無関心でいることはとても簡単だと思つていたのに、この湧き出る妙な感情はなんだらうか。

それだけじゃない。前世のおっさんの記憶があるはずなのに、目の前の幼子が誰よりも輝いて見えるなんておかしいし心拍数も異常だつた。その上、何とも言えない重くドロドロした、決して幼子が抱くようなものじゃない掴みきれない感情まで抱きつた。そこに純粋なトキメキは一切なく、ただ脳が痺れて心が震えているような飢餓感。当然、顔だつて引き攣る。心も体も近づきたくなかつた。このまま近しい存在になれば少しづつ心臓は爛れて、いずれ己を捨てるはずの幼子に溺れるのだと何となく分かつた。

イアンは己でも理解できない心のざわめきが、とても恐ろしかつた。

ゲームの中のイアンのように見つとも無く足搔くなんて嫌だつた。傷つきたくないし死にたくもなければ、知らないおっさんに犯されるのも修道院で一生暮らすのも嫌だ。粉々になると分かつているのに心を奪われに行く真似なんて当然絶対に無理である。

イアンは良くも悪くもおっさんであつた頃の記憶が、知識として頭に残つてゐる。心を奪われ捨てられた先にある痛みや恐怖をリアルに想像できてしまふし、世界の強制力もあるのだと思うと関係改善に向けての活力など全く湧かなかつた。

であれば、キッパリサッパリそんな気持ちを無かつたことにする他ない。イアンは滲み出でくる心のざわめきを切り刻んで、あつさりとゴミ箱に捨てた。だが、王妃教育のため王宮へ出向ければ第二王子殿下とすれ違う。生活圏内に頻繁に出向かなければならないので仕方がないが、イアンはそ

れがとても億劫おつこうだつた。

『イアン、次の夜会は出席しなければならない』

『はい』

『俺が贈るものを身に着けてほしい』

『分かりました』

『……イアン、今度何処かに買い物にでも行かないか？　お前の好みも知りたい』

『何を買つても嬉しく思つております』

『そうじやなくて、俺はもつと二人で』

『この後、王妃教育が控えてますのでそろそろ失礼します』

十の歳になつても第二王子殿下は、会えばこうしてイアンとの会話を試みてくれる。それに引き攣つた笑顔で当たり障りなく短く返答し、すぐに表情を消してスルリとその場を去るのが常だ。恐る恐る伸びられたその手を見えていないとでもいうようになつて、己の視界から外す。傷ついた顔を見る彼を見て胸を痛めると同時に、少しばかり憎らしい気持ちが湧きあがる。が、第二王子殿下に対する感情はどんなものでも、すぐにボコボコに殴つて捨てた。

『イアン、茶会だ』

『生憎、今月は予定が詰まつております』

『前々回もそう言つっていたと記憶しているが』

『ええ。その前々回と同じ理由です』

『そうか』

十二の歳の頃には第二王子殿下がイアンに向かつて微笑むことはほとんどなくなつていた。義務的に度々誘われることはあれど、口数は随分減つてイアンの好みを探ることもなくなつた。互いに表情も変えず言葉を交わすだけという事実に、身勝手ながら怒りにも似た気持ちが燃る。それでもその気持ちをクルクルと丸めて踏みつけてしまえば、どうということもない。

『来週、昼頃に』

『承知いたしました。先月は申し訳ございませんでした』

『いい、把握している』

『さよう』

適当に頭を下げその場を離れる。十四にもなると、ほぼ単語を投げ捨てるような会話とも言えな

いやり取りだけになつた。第二王子殿下の手は、もうイアンを追いかけることはない。相変わらず心の奥にしつこく現れるモヤモヤは滲み出ると同時に鉄バッドで遠くに打ち飛ばす。これでこのまま距離が空けばきっと何があつても平氣でいられるはずだ。そうしなければならない、とイアンは彼を見かける度に思う。

『茶会だ』

『はい。今回は伺います』

『そうか』

十五で学園へ入学し半年も経つと、王宮や学園の廊下でそれ違つても視線すら合わなくなつた。けれど月に最低限一度、決められた二人きりの交流がある。学園が休みで王妃教育もない日に王宮を訪れ、第二王子殿下の終わりの合図があるまで、ただ一人で静かに茶を飲むだけの時間。イアンは互いに会話も交わさず茶を飲むだけの時間に意味を見い出せない。そのため、二回に一回は適当なことを言つて断つてしている。当然第二王子殿下には予定を把握されていて、特別な用もないのに王族の誘いを断つていると知られていた。

それでも第二王子殿下は何も言わない。不敬だとも婚約についても何も。そういうえば学年が上がつた春頃、イアンが十六になつた時に、いつも通りプレゼントは贈つてくれたけれど、初めて

「おめでとう」という言葉を直接貰えなかつた。

イアンは心の奥底にしつこく芽生えるモヤモヤに辟易していた。モヤモヤの理由は毎回己でもよく分からぬ。ただ彼の顔を見るいつも何らかの昏い気持ちが頭を擡げて胸を搔きむしりたくなるのだ。搔きむしる前にしつかり廃棄しているので大きくならないが、正直この謎のモヤモヤには鬱陶しささえ感じていた。

そしてついにその日がやつてくる。第二王子殿下との関係が冷えに冷え切つてた学園生活一年目の始め、イアンの誕生日が終わつてすぐの頃に、平民出の神子がこの学園に入学してきたのだ。

主人公は記憶に違わず秋も終わる頃に十五になり、すぐに神殿で二度目の儀式を行い、そこで白く眩い光に包まれたという奇跡の子どもだつた。

神子になつてからかれこれ半年前ほどかけて、最低限文字を書けるように勉強したり住まいを神殿に移したりと色々準備をしてこの学園に入学してきたらしい。そんな噂は瞬く間に広がつた。

ゲームでは「慌ただしく入学準備をして半年後にやつと入学できた」とナレーションがあつたが、なるほど。確かに田舎から王都に出たばかりの、文字も書けぬ平民が学園へ入学となると、最低でも半年はかかるだろう。そもそも王族側が“神子と良い関係を築く”という思惑を抱えているので、主人公が恐ろしく阿呆でも王族と同じ学年へ途中入学すると決まつていたはずだ。今回はちょうど同じ年の王族がいるから、当たり前のように二年からのスタートになつた。

ちなみに色々と思惑のある現実と違い、ゲームでは主人公が中途半場な時期にこの学園へやつてきた理由は語られない。ただただ“年下も出したいし、ルートによつては意中の人間が先に卒業し学園内では会えなくなる”という状況も作りたい”というご都合主義的な理由でそうなつただけだと思う。年下と年上を相手にした場合のルートにそういう、独自のイベントがあつたはずだ。

イアンはゲームが開始されると、本当に記憶の中のゲーム通りだと戦慄したが、何をするでもなく傍観者を決め込んだ。それでも聞きたくもない話題は耳に入つてくる。異質な神子の存在は常に話題の中心にいた。当然のように年齢やクラスがバラバラな攻略対象者たちが様々なきっかけで主人公に興味を持ち、至る所で主人公に構う姿を目撃するようになるのは直ぐのことだつた。

『お前は本当に可愛い。アレとは大違いだ』

『アレって……婚約者様ですか？ アルフレート様の婚約者の方、とてもお綺麗じやないですか、僕なんて……』

誰に聞かれるとも分からぬ廊下で、この白々しい会話である。主人公は一か月もしたら第一王子殿下を名前で呼んでいた。イアンはそう呼んだこともないし呼んでいいと言われたことも無い

が、彼らはスムーズに信頼関係を築いているらしい。それにしても会話の内容が非常に不快である。「アレ」に対して即イコール婚約者と繋がるということは、己の知らぬところで散々馬鹿にされていると見て間違いないだろう。ぶん殴りたい気持ちを堪えて、イアンはモヤモヤを凍らせて叩き割った。

『時間だ、出ていけ』  
『はい』

そして最終学年へ突入した頃には、第二王子殿下はイアンへの興味も気遣いも何もかもを失つて、その目に映すのは主人公だけとなつた。最低限の茶会は続いている。今までと同様に二回に一回は断つていてイアンの対応は何も変わらない。けれど主人公との仲が深まれば深まるだけ第二王子殿下は変わっていく。

誘いは従者の寄越した手紙一枚で、返答も直接ではなく手紙でいいと言われた。少し前までは茶会中限定ではあれど、視線を寄越されていたものだがそれも次第に無くなつた。会話どころか挨拶の言葉すらなく、イアンの挨拶が空しく部屋に響くだけになつた。婚約者同伴の社交へも主人公を取り合ふようにして攻略対象者たちで参加しているらしく、イアンへ同伴の誘いがくることもない。こうして三年目の終わり頃には、二人きりの茶会では目も合わせず耐久で茶を飲み続け、一時間も

経つと冷たく「出ていけ」と吐き捨てられるようになつたのだ。

『それでは御前失礼いたします』

（関わらないようにして正解だつたわ。関わつた後でこんな態度を取られちや、やつてらんねーつてなもんよ）

イアンはそう内心で思いながらも頭を下げて部屋を出る。何もしなかつたから当然未来は変わらないし、ゲーム通り立派な当て馬ポジションになつたのだが、邪魔立てすることもないでの毒にも薬にもなつてないモブである。ゲームと違い主人公を虐めてもないし少しでも姿を見たら逃げるようしているので、きっと婚約を破棄されたとて罪状は付かないはずだ。

思つた通りに進んでいることに安堵するも、やはり出てくる謎のモヤモヤ。イアンは火炎放射器を構えてそれを燃やし、スッキリ爽快な気持ちを維持した。この不快なモヤモヤもゲームが終わつてしまえば発生することがなくなるだろう。やつとこの嫌な状況から解放されるはずだ。

（そしたらやつと本当の人生だな。俺金持の家の末の子だし好きにする。絶対人生謳歌してやる！）

イアンはその日が待ち遠しかつた。

「イアン様、到着しました」

馬車が止まり、扉の外からニールの声が聞こえてハツとした。いつの間にか到着していたらしい。音も無く静かに馬車の扉が開くと、ニールが微笑みながら手を差し出している。それに微笑み返し手を乗せて馬車からゆっくり降りると、相変わらず迫力のある白亜の城がドーンと目の前にあって、何度見ても頬が引きつりそうになる。

「ニール、一時間ほどだと思うから」

「……はい、お待ちしております」

「うん。いつもごめんね」

朝から暗い気持ちを悟られないように気を付けていたイアンだが、ニールにはバレているのだろう。苦笑したイアンと同じように苦笑するニールから手を離し、背筋を伸ばして前を見据えた。

「じゃ、行つてくるね」

「はい。お気をつけて」

いつも一時間程度で終わるこの苦痛な時間のため、無駄に家の馬車を使うのは気が引ける。その上時間が短すぎて家に戻ることも城に馬車を止め続けることもできず、近くの馬繫場ばけいじょうで待機してもらつているのが大変申し訳ないところである。

（まあそれもあと少しだけ）

気合を入れて王城を歩くイアンの顔には既に表情はなかつた。色々な人たちが忙しく働きながらも、イアンの顔には表情はなかつた。色々な人たちが忙しく働きながらも、

らも、イアンを目にすると廊下の端に寄り頭を垂れるのにもやはり慣れない。その目に憐れみがあることにも。

（相変わらずめちゃくちゃ気まずい。王子が二人揃つて神子に傾倒してるのはとつくの昔にバレてるし、それを諫めもせず傍観しているだけの俺のこともバレてるからなあ。色々な噂飛んでそー）

現在の家族の顔に泥を塗るつもりもないでの城での振る舞いに手は抜けなかつた。現世の両親と兄には情緒不安定さでかなり迷惑をかけた自覚がある分、これ以上の心労はかけたくないのだ。

「イアン様、こちらに」

「ありがとう」

王宮の使用人がイアンを案内してくれる。彼とも何度も顔を合わせたものだが、終ぞ笑顔を見たことがない。どちらかといふと嫌われているだろうことは気づいていた。イアンの予測では、彼は第一王子殿下の婚約者の支持者である。その支持する人間とイアンは立場が似ているためよく比べられるのだが、そちらの圧勝とはいかないで気に入らないのだろう。彼の仕事は完璧にも見えるが、イアンに心の内を悟られていることを考えると、まだまだと言つていいのかもしれない。

無機質な使用人の後ろをノロノロついて歩きながら、きつともうすぐここへ来ることもなくなるだろうと感慨深くなる。イアンの青春のほとんどは王宮で完結するので、この白亜の城の中での思い出だけは多い。と言つても良い思い出は何一つないのだが。

将来結婚することはないと分かっている婚約者のために、身を粉にして学ぶ王妃教育の辛さは言葉では表せない。本当ならば何も考えずに学生の時間を楽しみ、友人を沢山作つて思い出を作りたかった。そういうこともあってか、イアンを婚約者に選んだ王家に対する憎らしい気持ちは今となつても結構ある。こんな年になつても友人一人いないのは、決して王家だけのせいでは無いが一割くらいは責任があると思っている。

友人を一人くらいは作りたいと、幼い頃はよく考えていたものだ。例えば最も顔を合わせる機会のある、第一王子殿下の婚約者と仲良くなるのはどうかと思ったこともある。だが、あちらがイアンのことをライバル視するのが目に見えて分かり、面倒そうで関わることはしなかつた。同じ空間で王妃教育を受けているにもかかわらず義務的な会話しかしたことがないので、あちらも仲良くなる気はないと言える。

では学園の生徒たちはどうだろうか。しかし、それもかなり早い段階できつぱり諦めた。王妃教育で忙しすぎて同年代と関わることがほぼほほないからだ。学園内でも元々他の生徒からなんとか距離を置かれていた。婚約者との関係が微妙であることは見て分かりきつているので、皆が皆距離を測りかねていただろうし、イアンの固まつた表情も問題だつたようと思う。

同派閥の人間は、とも思つたが、こちらは媚びが凄すぎて怖かつたので、一定の距離を保ちそれで、イアンは家を一步でも出れば一切の欲を捨てると決めた。

ただ、己で決めたことなのになぜか地味に病んだことだけは解せない。友人が一人もおらず学園内でボッチ化が進みすぎると、人はどうやらメンヘラに進化するらしいのだ。日が経てば経つほど取り繕つた笑顔すら失うイアンを見て、周りの人間が気味が悪いとか怖いとか陰口を叩いていたことも知つてゐる。それでも特に改善することもなく日々と日々を過ごしていたのだから、色々と下手くそだなと思う。もつとやり方はあつたかもしれないが、それこそ今更だ。

そう言えば主人公によつて様々な婚約関係が破綻しだした頃、一つだけほんのり怖いことがあつた。他派閥からは感情がなさそうとすら言われるイアンは、その実心の中では色々と感情の起伏があつた。実際同派閥の人間は、イアンのことを気が許せる人間には愛想が良い人だ、と思い込んでゐる。気が許せる人間など家の中にしかいないのだが、他者からの見解はそうちらしい。

だというのに、何處でもそこでも発情する己の婚約者である第二王子殿下を見つける度に心の中が空っぽになつたような感覚になるのだ。己の心は死んだのかと戦々恐々としたものだ。

『……つ！　ま、待つてください』  
『待てないな』

そう、例えは人気が少ないとはいゝ、窓が完全に開放されている空き教室で彼らの交わりを初め

て目撃した時、分かつていたのに、知っていたのに心の奥に特大のモヤモヤが発生した。即刻全てを排気口のない掃除機で吸い込んで事なきを得たが、たぶんその辺りで完全に心がほぼほぼ無になつたのだと思う。それからも二人のあられもない姿を度々目撃することになるのだが、イアンの中にモヤモヤが発生する頻度は脅威のスピードで減つていった。

特に最終学年になつてからはモヤモヤは一切発生しなくなつた。一応、イアンの中では“第二王子殿下に対する何らかの思いが完全に消え去つた”と無理やり納得しているが、それにしては清々しいと思う気持ちもなく、かと言つて彼らに何を思うでもなく日々が過ぎている。

まさか本格的に己は壊れたのでは、と不安になつて鏡で笑顔の練習をしたのはわりと最近である。当然イアンの笑顔は美しくて完璧だったの「なんだ、完全に見限つただけか」と心穏やかに過ごしている。好きの反対は無関心というので、きっと第二王子殿下に対する一ミリの関心もなくなつたのだろう。

不穏なモヤモヤが出なくなつてからというものの、色んなことをやり過ごすのが随分楽になつた。“最小限の接触”をこのまま維持し、いずれ必ずこのゲームの舞台から抜け出してやる、という決意は変わらぬまま、本日も今までと同じく無難に婚約者との義務的な茶会をやり過ごすつもりだ。

それがまさか、ガラガラと平穏な日常が崩れていく始まりの日になるとは、想像だにしていなかつた。

◇ ◇ ◇

「お連れしました」

「入れ」

王宮の使用人が扉をノックし、中から了承の言葉があると仰々しく扉を開き、イアンに向かつて頭を下げた。頭など下げたくないだろうにと思いつつも、微笑みもせず頭を下げて中へ入る。

「失礼いたします」

こちらをチラリとも見る気がないらしい第二王子殿下は、主人公の攻略対象者の一人とあって、やはりその顔はとても美しい。幼き頃は微笑んだり傷ついたり困つたりと様々な表情があつたようにも思つが、最近では全くの無表情になつてしまつた。

否、よくよく思い出すとそういうわけでもない。主人公の前ではいつも優しく微笑んでよく話しかけているので、単純に主人公とイアンの好感度差の問題だろう。

「御尊顔を拝し……」

「いらん、座れ」

「はい」

言葉を遮られようと、もう筆舌に尽くしがたいモヤモヤは生まれない。己や他人の感情に振り回

されるのは疲れるので良きことである。言葉通り対面のソファに座ると、背筋を伸ばしてテーブルに広げられた菓子に視線を落とす。

「お待たせいたしました」

「ありがとう」

サツと王宮の使用人が淹れてくれた紅茶の匂いを嗅ぎ、ホッと一息ついてから口を付けた。それからはただ静かに、目の前に並ぶ最近流行っているらしい菓子を遠慮なく摘まんと口に運んでいく。ちなみに既に第二王子殿下の興味は一冊の本に移っている。そちらの内容に釘付けで、時間になるまで視線がイアンに向くことはない。

王宮でよく利用する、いくつかある内の一つであるこの応接室は少し狭い部屋になる。狭いとは言つてもあくまで他の応接室に比べたら、というところで前世で言うと十二畳以上はあるはずだ。ここは王族がプライベートで使用することが多い場所だ。一応まだプライベートだという認識があるのだな、と不思議な気持ちになりながら美味しい菓子に舌鼓を打つ。

実はこの菓子類はイアンを気遣つて出してくれたものではない。イアンに食べさせ、その反応を使用者から聞き出し主人公に渡すため、言わば味見役で食べさせられている。もちろん棚ボタで流りの馬鹿みたいに高いお菓子が食べられるのだから文句はない。口の中でホロホロと解けていく甘いお菓子にほんのり口角を上げる。直ぐにスッと元の無表情に戻ってしまうが、これは使用者の

仕事を手伝つてているのだ。美味しいよと一応教えてあげている。

（俺、優しすぎない？　どう考えても優しーよな、俺つて）

誰も褒めてくれないので、イアンはよく頭の中で己を褒めることにしていた。病んでいた時になるとなくしていた苦肉の策が癖づいてしまったのだ。家族には、触れられたくないと態度で示して踏み込まれないようにしているし、外ではボツチなのだ。相談相手は己しかおらず、気づけば脳内会議が得意な人間になつていた。全く笑えないが。

パラリと本のページを捲る音がする。イアンだってこんなにつまらない時間は本でも読んで過ごしたい。だが、第二王子殿下からは何一つ言葉が無いので何もできない。ぼんやりとテーブルの上にある紅茶やお菓子に視線を集中させて、偶に視界の隅にいる微動だにしない人間を薄つすらバレないよううに観察したりするだけだ。

現状、この部屋には使用人や護衛騎士など、他の人間の気配が多い。多分この時間は優雅に本を読んでいる王族以外の全員が苦痛に思つてはいるはずだ。何せ動きもせずただただ沈黙が続くのだ。やることが無さすぎである。

暇があるので脳内では今後の彼はを思い浮かべて時間を潰すことにした。いつもと大体同じだ。このゲームの時間軸を乗り越えたらば、イアンはお役御免で婚約破棄を言い渡されるはずだ。最終学年となり数か月前には十八歳の誕生日も迎えた。例年通りプレゼントは贈られたが、遂には消え

物である高級なお菓子だけとなつたので、その日は近づいていることだろう。

この綱渡りのような生活もあと半年ほどだ。そうすれば見事に婚約破棄されて自由になれる。

ゲームの中では主人公が誰と結ばれるかによって婚約破棄されない可能性もある。というか、成立しなかつた他の攻略対象者たちのその後が特に語られないので、婚約破棄されたのかされて無いのか分からぬのだ。

けれど、イアンは婚約解消を目指してきちんと不貞の証拠を集めている。婚約破棄を宣言されたら証拠を突き付けて解消へもつていく腹積もりだし、もし第二王子殿下と主人公が結ばれなかつたとて、どうにか解消する予定である。なにせメインのヒーローは第一王子殿下なので、第二王子殿下が振られる可能性は高いのだ。密かに王族との軋みなき婚約解消の方法まで調べている。

最初から婚約解消を目指してはいたものの、実際に王妃教育を施されつつ浮気を目撃する日々を過ごすうちに「こんな男と結婚して堪るか!」という気持ちが果てしなく大きく育つた。他の悪役令息たちが物語終了後どうするかは知らないが、イアンは絶対に結婚しない。

そもそもゲームの中の第二王子殿下は人が悪い。好きな人ができたならさつさと婚約を解消すればよいのだ。中途半端に婚約したままだからゲームの中のイアンは希望を捨てきれず、「自分の下に歸つてくれるはずだ」と信じ続けて結果的に心を壊した。現実のイアンからすると、アウト中のアウト、どれほど顔が良くとも付き合つてはいけない男ナンバーワンである。

(はあ、まだかなー。今何分経つた?)

イアンは既に二杯目になる紅茶を飲みながら内心で溜息を吐く。何もできない時間はともかく流れが遅い。毎回暇なので、今までのことやこれからのことを考えているのだが、それにも既に飽き飽きしている。この部屋には時計なるものはないので、大抵一時間もすると護衛騎士が己の懐中時計を確認し、サッと扉側へ移動しイアンが出ていくのを待つ。それが終わりの合図だ。

(あの野郎、早く時間進めよ! ってか無理かあ)

ちなみにその護衛騎士は攻略対象者だ。とはいえたまだ見習いなので隣には先輩騎士が並んでいる。割と凡庸な顔の人間が多い中、第二王子殿下とイアンに負けないくらい目立つ容姿をしているから分かりやすい。彼も完全に主人公に一直線となっており、あちらこちらで交わっている。主人公が現れるまでは婚約者に心の底から惚れ込んでいたよう見えたのだが、こうもあつさり心変わりをするなんて、見ていて気持ちの良いものではない。

イアンと第二王子殿下の関係と違つて、他の攻略対象者たちは婚約者と仲良くやつていたのを何度も目にしていた。だから、イアンは彼らの変わり様を心底軽蔑したし、正直攻略対象者は皆嫌いだ。

ムツリとした顔で微動だにしないショーン・バリーは、前はもっと表情豊かに笑つたり困つたり顔をしたり、婚約者にデレデレしたりしていたはずだ。だが主人公に出会つてからというものが、獲物を狙うかのようにいつも目をギラギラさせていて正直怖い。そして隙を見て主人公に襲い